豊岡短期大学論集　No.15, 241～250（2018）

保育実習に望む学生の不安度についての考察

―受け入れ園の気づきとともに―

芳井　宏暢・坂口　静子・浅倉　涼二

A study on the anxiety level of students who want to practice childcare：Including a nursery school's noticing

Hironobu Yoshii, Shizuko Sakaguchi, Ryoji Asakura

豊岡短期大学 論集
第 15 号　別 冊
平成 31 年 3 月 31 日　発 行

保育実習に望む学生の不安度についての考察
― 受け入れ園の気づきとともに ―

A study on the anxiety level of students who want to practice childcare ：Including a nursery school's noticing

芳井　宏暢　坂口　静子　浅倉　涼二

Hironobu Yoshii, Shizuko Sakaguchi, Ryoji Asakura

はじめに

社会では、近年、「学生のコミュニケーション能力が低い」ということが指摘されているが、本当に幼児教育を学ぶ学生のコミュニケーション能力は低いのであろうか。保育士や幼稚園教諭を志望する学生（実習生）にとっては、子ども（園児）や保護者、指導者と接する際にコミュニケーションが大切であるということは、対人援助職として自明のことである。それぞれの保育現場は、固有の保育目標や保育理念を持つ。実習生が、実習園とフィットしない中で、実習意欲が持てないでいることは、実習期間を不本意なものにする。そこで、筆者達は、保育現場で学ぶことの重要性と園と実習生との相性を少しでもミスマッチが減らせるようにするには、どのように学生を指導するべきか、日々探求している。

また、実習生を受け入れる保育園や幼稚園では、基礎的な対人関係スキルのはぐくみと成長は、大学で学んでいると期待される中、いざ実習に行けば「コミュニケーション能力に少し欠ける」などという評価を受ける学生も少なくない。そこで、近年の学生のコミュニケーション能力が、どのような影響を及ぼしているかについて、検証にもとづいた情報を実習受け入れ園や大学教員に伝える必要があると考えている。

このようなことから保育を学ぶ学生にとって、なぜコミュニケーション能力が重要なのかを再考するとともに、実習においてコミュニケーション力がどのような影響を与えているのかを具体的に検証することを本稿の目的としている。

調査方法

（Ⅰ）対象者

①大阪府内 A 大学の保育所実習に行く 2 回生・3 回生（有効回答数 140 名）

②実習生の受け入れを行っている兵庫県内 B 保育園・C 保育園、茨城県内 D 保育園の実習生指導保育士（有効回答数 16 名）

③大阪府内 A 大学の実習訪問教員（有効回答数 14 名）

（Ⅱ）時期

2018 年 7 月～8 月にアンケートの趣旨及び内容を説明し、同意を得られた学生、保育士、大学教員のみ実施した。

（Ⅲ）調査内容

学生には実習前の不安度や自身のコミュニケーション能力や生活力を問う無記名アンケートを行い、保育士と大学教員には、近年の学生のコミュニケーション能力などを問うアンケートに協力してもらった。

（Ⅳ）倫理的配慮

調査により得た情報は研究以外に使用しないこと、個人情報保護に留意し、厳重に管理することを口頭及び書面で説明の後、同意を得られた者に実施した。

結果と考察

(1) コミュニケーション能力について

今回、アンケート調査に協力してくれた学生達は、幼い頃から当たり前のようにインターネットを使用していた世代だと言える。インターネットは非常に便利なツールで、知りたい事をすぐその場で調べることができ、人に物事を尋ねたり、身近な人から学んでこなかったり等して大きくなってしまった学生もいる。スマホでの SNS などコミュニケーションツール多様化の社会背景の中、大学生の生活力や対人関係のスキル低下が指摘されている。

a)学生の考え

この調査では、総合的に 2 回生より 3 回生の方が、自分自身のコミュニケーション能力に自信があると裏付けられた。3 回生は、前年の実習の経験やアルバイトの勤続年数も長いことなどの理由で、自分自身に自信がついていると考えられる。(図 1、図 2)

各学生のコメント欄を見てみると、「積極的に自らあまり話しかけることができない。タイミングを逃してしまう。」（2 回生）や「自分の気持ちを伝えたい時に、大勢の前だと緊張して伝えられない、上手く自分の気持ちを言葉にできない時がある。」（2 回生）、「質問はあるかと尋ねられてもすぐに聞くことができない。(質問する質問がわからない。)」（3 回生）や「人前に立って話を進め

ていく時、自分の力を出し切れない。」（3 回生）との意見が出た。

学生の立場からすれば、親しくない者がいない場所や場面では、その場に適応するだけで精一杯であるのも筆者達は理解する。

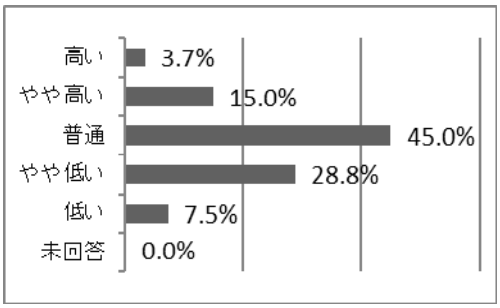

図 1（2 回生）

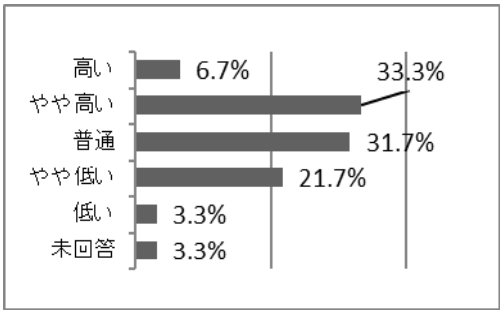

図 2（3 回生）

【自分のコミュニケーション能力について】

b)受け入れ園の考え

保育園の保育士たちの約 88%が近年の学生のコミュニケーション能力に普通とやや低いの項目にチェックをいれている。(図 3)

コメント欄には、「短い実習期間の中で、わからないことがあってもそのままにしているように思えるが、受け入れ側の態度も聞きやすい雰囲気を作っておくことも重要と思う。」という自園としての反省があった。また、一方では、「わからないことを聞かず、わからないままにしてしまい、自己判断でやってしまう。」との学生特有の問題点が記入されていた。

実習中には、1 日の終了時や実習を双方の立場から有意義にするためになんらかの形で設けられている打合せの場面がある。指導保育士が、「何か疑問に思っていることはないか？」と尋ねても実習生からのコメントが無い事が、近年多いと筆者達は感じている。実習中に「自分だったら、あの場面で、あの子をどう捉えて、どのような意図をもってどのような関わり方をするのか」を当事者として思考できていければ、何らかの疑問は生まれてくると思う。例えば「先生があのようにされたのはなぜですか？」と実習生が疑問を投げかけることができたとしたら、保育の大事な場面に気づくことができ、双方の持ち味を重ね合わせた有意義な実習になると考える。

c)大学教員の考え

A 大学の教員の約 57%が近年さほど変わらないとチェックしている。(図 4) これは、A 大学の学生は「先生」を志望している学生が大半で他学部より社交性が高いと筆者達も感じている。

しかしながらコメント欄は、「TPO を含め考える力が低下しているように思う。」や「教員に対して公私の区別がつけられない。甘えがある。」などの厳しい意見もあった。

筆者達は、大学で見せる学生の姿と実習時の巡回訪問で見せる学生の姿の違いに驚くことがある。

普段は、積極的な学生が実習先では消極的であったり、逆に日頃は目立たない学生が、実習中にはいきいきとした表情で取り組んでいたりすることがある。それぞれ固有な保育現場に立つことは、学生の多様な側面を浮き彫りにする機会でもあると考える。

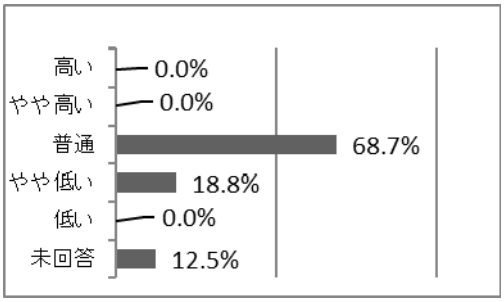

図 3（受け入れ園）

【実習生のコミュニケーション能力について】

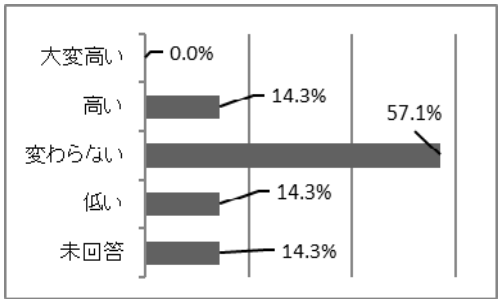

図 4（大学教員）

【学生のコミュニケーション能力について】

(2) 書く力や記録する力について

実習時には、コミュニケーション能力の必要性と同様に、日誌などの書く力や記録する力についてのデータが下記の通りである。（図 5、図 6）

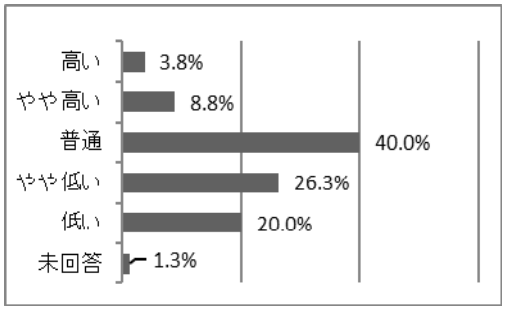

図 5（2 回生）

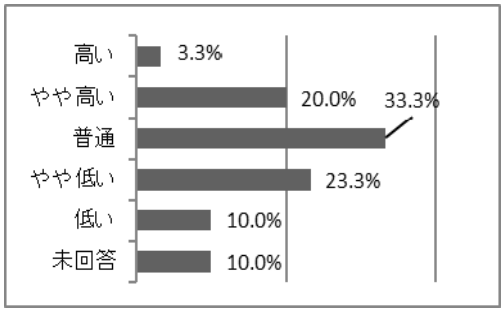

図 6（3 回生）

【自分自身の書く力と記録する力について】

受け入れ園の保育士においては、実習生の書く力や記録する力について約 80%が、普通もしくはやや低いとチェック欄に記入をしている。（図 7）

コメント欄では、「日誌、指導案の書き方をもっと理解する。（漢字の練習を含む）」と厳しい指摘があった。また、大学教員たちの半数以上が、低いもしくは非常に低いと感じている。（図 8）

実際、学生達はスマホなどを使って、常に言葉のやりとりをしている。そう考えると、どの時代よりもたくさん文章を書いているという事になる。

しかし、文章を書く意義は、読んだ相手に何かを伝える。その結果、何か変化が生じる。また、読んだ相手が「そうか」と納得したり、自分が、書いたことで気持ちが整理できたり、新しいことを見つけたりできる。受け入れ園よりも大学教員の方が、学生の書く力・記録する力について、かなり厳しく評価している。これは、その力が学生には身についていないと大学教員は断言していると言える。

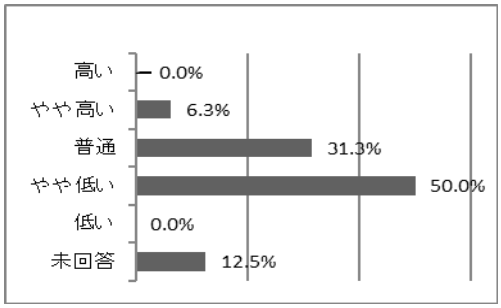

図 7（受け入れ園）

【実習生の書く力と記録する力について】

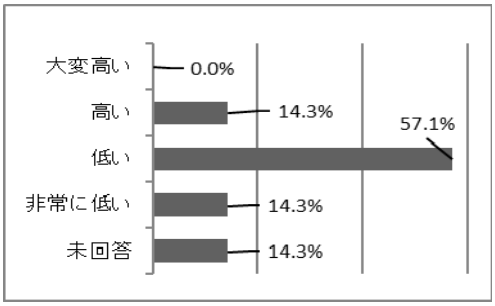

図 8（大学教員）

【学生の書く力と記録する力について】

社会背景としても、現代の学生達は、実態を見ると通学時や塾に通うための防犯対策として、小学生の頃から携帯電話やスマホを所有していたと思われる。以前には短い文章でメッセージを伝えることはあっても、今のように絵文字やスタンプでのやりとりが主流になり、自分の言葉で相手に伝えるといったことが極端に少なくなっているのが現状である。絵文字やスタンプなら選ぶだけで、この場面ではコレといった暗黙のルールがあるので分かりやすいが、言葉は普段から使用していないと、書く力や記録する力は到底高まってはいかないと筆者達は推測した。そこに、現代の学生の弱点とも言える状況が見えてくる。

(3) 臨機応変に臨む力について

臨機応変とは、状況に応じて適切に行動することであり、日常的に使われる言葉だが、実際に行動することは、なかなか難しいことである。

実習時に大学で習っていないことや教科書に書いていない出来事が、実習先で起こった場合の適応力を下記のデータにまとめた。

a)学生の考え

2 回生の約 63%、3 回生の約 76%がなんとか対応ができそうだと回答している。(図 9、図 10)

コメント欄には「わからないことはわからないと相談する、知らないことはハッキリ言える。」(2 回生）や「困った顔をせず、対応できるようにしたい。」(3 回生）の頼もしいコメントがあり、逆に「教科書に載っていることもできるか不安。」(2 回生）や「習っていないことがあるとテンパってしまう、何もできないと思う。」(3 回生）と記入する者もいた。

上記の3回生のコメントにあるように、学生自身が実習に不安を抱えており、実習を繰り返し行っても消えるものではないと推測できる。

普段の学生生活やアルバイト、ボランティア先でのことを振り返ってみて「わからないことは相談できる」と自信はもてるものの、実習時に専門的なことが問われると不安が一気に高まるといった状況が垣間見える。

不安は経験を重ねることで自分なりの対処法を見つけていくことができると考えるが、学生にとって実習が初めての経験の中、不安を抱えることは当然のことである。さまざまなことを学校で学び、実践したいという思いをもって実習に望むが、現場に出ると、思うように体が動かず焦りがちになるのだろう。

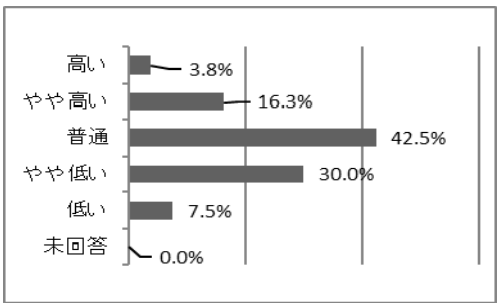

図9（2回生）

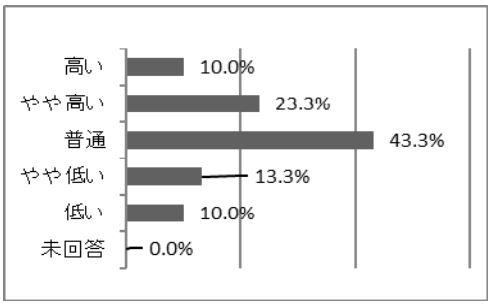

図10（3回生）

【自分自身の臨機応変対応力について】

b)受け入れ園の考え

受け入れ園からは、「わからない、知らない、できないが先になり、全て指示されて気付くことが多い。」、「教科書や大学で習っていない事を現場で知る事が実習だと思うため、臨機応変に対応できなくても、できるようになれば良いと思う。」（図11）という意見が出された。

実習生として、保育士からの指示を待ってばかりでは、良くないことであり、自分なりの考えを持って間違いでも行動して欲しいと考えている。実際、保育の現場は忙しい。そのような状況でも実習生をあたたかく応援して下さる保育士が上記の様におられることは、学生にとっても大学教員にとってもありがたいことであると、筆者達は考えている。

c)大学教員の考え

大学教員からは、「自ら気付いて行動できる学生は減っていると思う。」、「型にはまったことはできるが自由度の高い課題は不得意であるから臨機応変は無理。」とのコメントを記入していた。（図12）

以上のことから改めて考察すると、臨機応変に対応するための能力は、生まれながらに所有している者もいるが、自分の努力次第で養うこともできる能力であると考える。大学生活の中でも想定外のことが、発生することがある。その時に右往左往して手をこまねいているだけでは、事態はますます

悪化することがあるだろう。

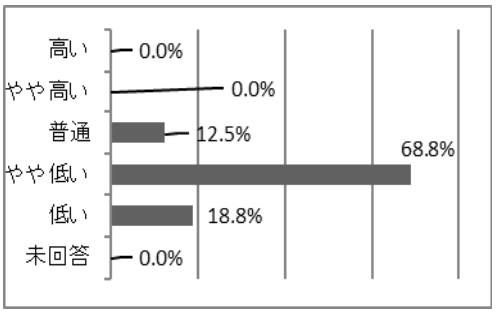

図 11（受け入れ園）

【実習生の臨機応変対応力について】

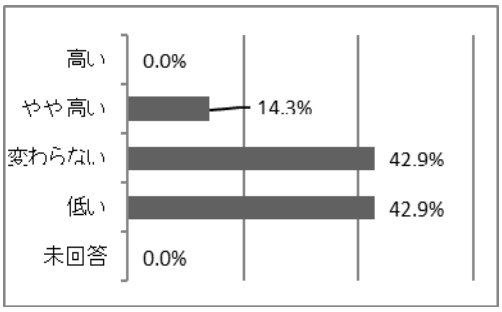

図 12（大学教員）

【学生の臨機応変対応力について】

例えば、実習中に園児達と鬼ごっこ中、実習生に「つかまるのが嫌だから、やめる」と、ある園児が言った時に保育者としてどんな言葉をかけるのか、実習生は、その園児の個性や育ちの傾向、周りの子どもとの関係性、時間帯や場の状況、年齢による発達段階などを総合的に判断し、臨機応変に的確な言葉かけの対応をしなければならない。実習期間中では、少し高度な臨機応変力が必要である。

最近の就職時の面接質問の中に「あなたを色に例えるとなんですか？」と質問されることがある。これは色に対しての問題でなく、自分が例えた色に対して、根拠をもって筋道を立てて説明できるかどうかが重要なポイントになるが、面接官はこの質問で、とっさの場面での学生の機転を試している。この様に保育の現場以外でも、臨機応変な対応力が必要とされていることがわかる。

筆者達も含め、人生経験豊かな保育士や教員達は、学生達により一層臨機応変に対応する力を育んで欲しいと願うデータの数値と推測する。

（4）行動力や生活力について

a)学生の考え

社会生活を営むのに必要な能力については、以下のデータである。（図 13、図 14）

学生のコメント欄には、「自分の行動で自信が持てない時にすぐに聞くことができない。」（2 回生）や「次は何をすべきなのかという事を頭の中ですぐ考え、行動することができない。」（3 回生）など消極的な記述が目についた。

b)受け入れ園の考え

B・C・D 保育園からは、「挨拶や期限などを守れず様々な学生がいる。」や「学生が思う実習と園側が思う実習のズレが大きいように感じる。学生にとっての実習は少し考えが甘い。」との意見が出た。（図 15）

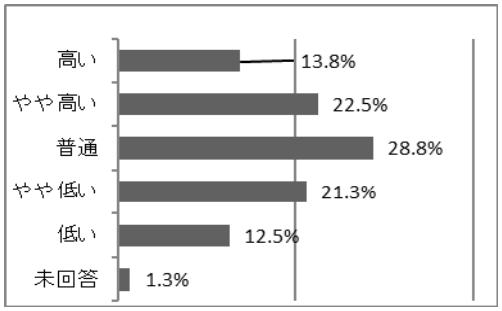

図 13（2 回生）

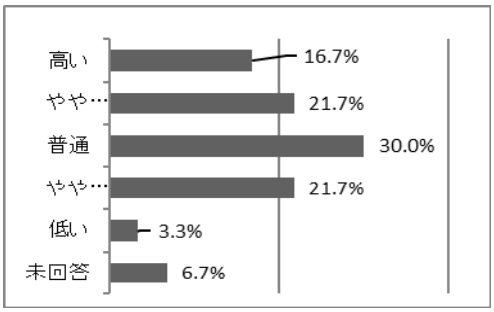

図 14（3 回生）

【自分自身の日常の行動力や生活力は？】

c)大学教員の考え

大学教員は、「社会全体に不寛容な空気が広がっていることを背景に、様々な事象に対して被害的に受け止める学生が多くなっている。そのことが他者とのあつれきを生み、自己改善に向けた努力を妨げているように感じる。」や「指示待ち傾向の学生が増加しているように思われる。創造的に提案する力が減少している。」などの厳しい意見が出た。真逆の意見として「アルバイトなど、お金の管理等で苦労する学生が多いため生活力は、それほど弱いとは感じない。」と回答する教員がいた。これらは、両極端な回答にも見えるが、各々の考えは十分うなずける。（図 16）

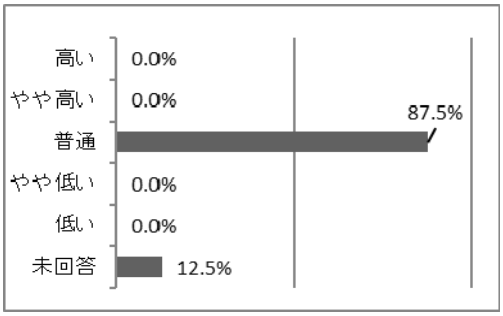

図 15（受け入れ園）

【実習生の日常の行動力や生活力は？】

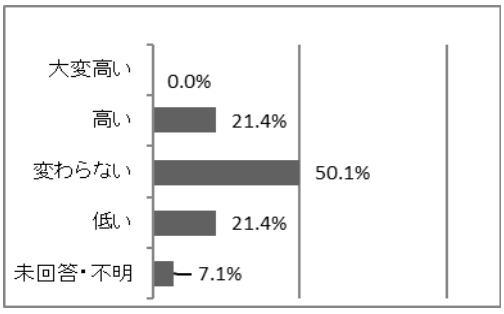

図 16（大学教員）

【学生の日常の行動力や生活力は？】

以上のことから考察すると、人は「行動力や生活力」について考える時、成人であれば、また社会人であれば、この程度の力はあるだろうと高を括って考えるだろう。しかし、現実はそうでなく筆者達も自分を振り返ってみた時には、難しいものであると考えている。

人は、「面倒くさい」と後回しにしてしまうこともある。PDCA サイクル、「P＝plan D=do C=Check A=Action」などを基に目標を立てて、行動力を身に付けることは非常に重要である。学生達がよく「ダラダラと TV を見てしまい時間が無くなった」や「ネットサーフィンをしていて睡眠不足だ」と言う

が、仮にTVやネットで知識が付いても行動力を引き上げることはできないのである。

自らを律して行動していくことの精神的強みを持ってほしいと願う。

まとめ

コミュニケーション能力とは、一方的ではなく双方向的に聞くことと話すことのバランスをとり、人間関係を維持しながら、意思疎通をしていく能力であり、子どもと関わる職種（幼稚園教諭や保育士など）に就くなら、「人がすき、子どもがすき」であることが、まず要である。

昨今では、機械化・IT 化で出勤から退勤まで「人」との関わりがなくても仕事に従事できる業種も多数ある。コミュニケーションのデジタル化で、コミュニケーション（伝達する情報）が単純化・短縮化・合理化され、“Face to Face”のコミュニケーションから、“Face to Tool”のコミュニケーションへの移行が進んでいる。この Tool の代表格がスマホやパソコンである。便利になった反面、実生活よりもネットに自分という存在を見出し、現実世界からネットの世界に引きこもっている者もいる。

しかし、保育の仕事は、「子ども（幼児）」「保護者」や「同僚（上司や部下）」など『人』との関わっている時間が他の職業より多い。つまり、“Face to Face”のコミュニケーションを取ることが欠かせない職業である。

衣食住・知恵・仕事・人間関係など、すべてを含め人は生活している。これらすべての力が生活力であり、生きていくための能力である。生活力＝生きていくための力、「サバイバル力」というように表現をかえてみると、どのような状況下であっても対応することが出来る力という事になる。これらに「対応できる人」の育成が、このアンケートを通して保育を行う者には、今後より一層重要になると痛感する。

例えば、保育士や幼稚園教諭として子ども達を任された時、急激な環境の変化や災害に出会った場合、その環境に対応・変化していかなければ、子ども達を守ることができない。自らが対応していく能力と共にコミュニケーション能力が必要になる。

本稿の調査から、学生のコミュニケーション能力の差は、個々の学生の生活力の差異によって、格差があるといえる。親しい者同士は、スマホなどの利用により、人間関係が狭められていると同時に、顔を合わせない非対面的コミュニケーションが促進されていると推測される。また、親しくない者同士（実習先の園や大学教員、バイト先など）では、社会的背景の影響もあり、対面的コミュニケーション能力は低下していると思われる。

現代は、インターネットなどを用いて、あらゆる情報が受け身の状態でも得られ、数十年前のパソコンなどがない時代とは、激変している。したがって学生達は、今後少しずつでも、世代の異なる人間（親しくない者同士）に対し積極的に接することを心がけ、共有する歩み寄りをしたり、能動的態

度が必要ではないだろうか。何故なら、コミュニケーション能力は、日常生活や会話を通して積極的に他者と関わらなければ、なかなか身に付かないものであると筆者達は考えるからである。

今回のアンケート調査において、筆者達も日頃から学生や他者とのコミュニケーションが重要だと再認識した。ただ単に社会背景の変化によって引き起こされたことの結果だったと片付けてしまわず、教育及び保育を行う人材を養成する観点から、コミュニケーション力、様々な場面においての対応力等、授業科目に盛り込む努力をしていかなければならないと認識した。

保育教育の人材育成は実習教育と実践現場との共同作業である。保育実習に臨む学生の不安度が明らかになった本稿をもとに、実習受け入れ園と養成校が実習協議会(養成校と実習校が情報交換する機会)等を経て、双方が意見交流を重ね、さらなる人材育成を目指し、現場と養成校がより連携が深まるよう努力していきたい。

次なる課題として、養成校における実習指導者と実習現場の実習指導者の双方に向けた研修は急務の課題であろう。

謝辞

本調査を実施するにあたり、アンケート調査に協力いただいたB保育園・C保育園・D保育園の園長や先生方、とりわけA大学の学長先生、ご担当の先生方や学生には深謝いたします。

参考文献

児玉光雄.（2018）. *本番に強い子に育てるコーチング*. 河出書房新社.

尾木直樹・茂木健一郎.（2017）. *教育とは何?日本のエリートはニセモノか*. 中央公論新社.

斎藤孝.（2018）. *小学校3年生から始める！こども語彙力1200 考える力が育ち、頭がグングンよくなる*. KADOKAWA.

坂口静子・岡（宮薗）美佳.（2018）. 保育実習（保育所）Ⅰの学生の実態を踏まえた保育実践演習の授業展開―「保育実践演習Ⅰ・Ⅱ」の在り方を探る―. *常磐会学園大学研究紀要*, **18**, 31-44.